

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Incidence and Prognostic Impact of Intracranial Hemorrhage after Endovascular Treatment for Acute Large Vessel Occlusion

(主幹動脈閉塞患者に対する血管内治療後の頭蓋内出血の検討; RESCUE- Japan Registry 2 サブ解析)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 環境病態制御系

臨床研究学 (指導教授 森本 剛)

氏 名 金 城 典 人

【はじめに】急性期脳主幹動脈閉塞症による脳梗塞に対する治療として脳血管内治療 (EVT) が確立されたが、術後に頭蓋内出血 (ICH) を呈する症例が少なからず存在する。我々は今回、脳梗塞の多施設登録研究データを用いることで、急性期脳主幹動脈閉塞症に対し EVT を施行後に ICH を来した症例の機能的転帰と、症候性頭蓋内出血 (SICH) を来した症例の背景因子について検討した。

【方法】発症 24 時間以内の急性期脳主幹動脈閉塞例の多施設登録研究である、RESCUE-Japan Registry 2 に登録された 2420 例のうち、EVT を施行され、発症後 72 時間以内に ICH を来した症例と非 ICH の症例の脳梗塞発症 90 日後の転帰良好 (mRS 0-2) の割合を比較した。また、神経学的重症度評価スケールである National Institutes of Health Stroke Score において発症時より 4 点以上の増悪を来したものを SICH 群と定義し、増悪のなかった無症候性頭蓋内出血 (AICH) 群と合わせて転帰および背景因子を検討した。

【結果】対象は EVT 施行例 1281 例 (平均年齢 74.6 歳、男性 760 例) で、333 例に ICH が発生していた (ICH 群)。90 日後転帰良好の割合は ICH 群で 24.0%、非 ICH 群で 47.8% であり、調整オッズ比は 0.3 (95% CI 0.2-0.5, $p < 0.0001$) であった。また、90 日以内の死亡は ICH 群で 9.6%、非 ICH 群で 8.4% であり、調整オッズ比は 1.2 (95% CI 0.7-1.9, $p = 0.5$) であった。ICH 群では非 ICH 群よりも前方循環系の閉塞例が多く (91.3% vs 86.4%, $p = 0.02$)、到着時の血糖値が有意に高かった (中央値 136mg/dl vs 125mg/dl, $p < 0.0001$)。ICH 例の中で SICH は 36 例 (10.8%) で認め、90 日後転帰良好の割合は SICH 群で 8.3%、AICH 群で 25.9% であり、調整オッズ比は 0.2 (95% CI 0.04-0.9, $p = 0.02$) であった。死亡率は SICH 群で有意に高く (30.6% vs 7.1%; $p < 0.0001$)、調整オッズ比は 9.2 (95% CI: 3.7-26.4) であった。また、SICH 群では AICH 群と比較して周術期のエダラボン投与の割合が低かった (61.1% vs 80.1%, $p = 0.009$)。

【まとめ】急性期脳主幹動脈閉塞症患者の予想よりも多くの割合が EVT 施行後 24 時間以内に ICH を発症していた。発症から 90 日後の機能的転帰は、ICH を発症した患者、特に SICH を発症した患者で不良であった。EVT 時間の短縮、周術期のエダラボン使用、入院時に高血糖ではないこと、は ICH 発症率の低下と関連したが、当初出血の発症に関連すると予想された、入院前からの抗血栓薬の使用、rt-PA 静注、遠位閉塞に対する EVT 施行、との関連はみられなかった。